

博士論文要旨

論文題名：近世日本の儒教と喪祭 — 闇齋学派の朱熹『家礼』受容と儒礼実践に関する思想史研究 —

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

マツカワ マサノブ

松川 雅信

本稿では、朱熹『家礼』に基づく儒式喪祭礼の受容と実践という視角から、闇齋学派の近世日本における思想的展開を論じた。具体的に第一章から三章にあたる第一部では主に浅見綱齋を、第四章と五章に該当する第二部では尾張崎門派を検討対象とした。

序論では、戦前・戦後を通じた闇齋学派研究の動向を整理するとともに、そこに孕まれた問題点を指摘した。戦前期に「尊王斥覇」の「国体」思想として顕彰された闇齋学派評価は、戦後反転した。学派の〈歴史的連続性〉と〈学派的完結性〉は否定され、概して闇齋学派は古学派の登場によって「克服」されていく対象として、位置づけられることとなったのである。しかしこうした戦後の理解では、近世全般を通じて最大の規模と体系性を保持した闇齋学派の同時代的な思想的影響力や、その意味を問うことはできない。そのことはとりもなおさず、戦後の研究が戦前のそれを本質的な形で批判し得なかったことを意味する。そこで本稿では、『家礼』に基づく儒式喪祭礼の受容と実践という視角を用いることで、戦前・戦後の研究成果を止揚した新たな学派像を呈示することを試みた。

第一章では、本稿全体を見通すための予備的考察として、幕藩制下の近世日本において仏教と儒礼とがどのような関係性を有して存在していたのかを俯瞰的に検討した。従来、寺請・寺檀体制が存在したことで近世日本では、儒礼は展開されなかったものと論じられてきた。しかし、そうした捉え方は仏教の存在を超歴史化したものに過ぎないということを指摘した。実際には、十八世紀中葉を境に仏式喪祭礼は既成事実化し、この前後で儒者の儒式喪祭礼実践のあり方も大きく変化することが明らかとなった。つまり、概ね十八世紀中葉以前の儒者達は仏教を排した形で儒式喪祭礼を執り行い、それ以後の儒者達の場合には仏教の存在を前提とする儒式喪祭論を呈示していたということが明らかとなったのである。

第二章と第三章では、浅見綱齋の『家礼』論と鬼神論を、彼の思想構造、当時の思想状況・社会状況等を念頭におきつつ検討した。綱齋は、近世日本に適した形で『家礼』の喪祭礼が確立されることを希求していた。それは彼の〈生国主義〉という自他認識と、「日用」という朱子学理解とに関わる問題であった。綱齋は、当時滲透しつつあった仏式喪祭礼を排しつつ、近世日本において実践可能な儒式喪祭礼の方法を呈示することとなった。また同じく仏式祭祀を排すという目的のもとで綱齋は、仏教の死生観や祭祀論よりも『家礼』が示す祖霊祭祀の方が

有効であることを示すために、朱熹とは異なる形での鬼神論を呈示するに至った。そしてこの綱齋の鬼神論は、垂加神道を含む同時代の闇齋学派にも少なからず影響をおよぼしていくこととなったのである。

第四章と第五章では、十八世紀中葉以後の闇齋学派の展開として、尾張崎門派を対象に彼らの儒式喪祭論を考察した。尾張藩巾下学問所の堂主に就任した蟹養齋は、主に尾張藩士で占められた門弟達が儒式喪祭礼を実践していく方法を、当時の社会状況に即しながら呈示していた。養齋は、仏式喪礼に関しては既にこれを排すことができない現状にあると判断し、仏教と共存する形で儒式喪礼を執り行う方法を示した。他方で、当時流行していた宗教的信仰に惑わされることなく、門弟達が儒式の祖霊祭祀を実践するよう方向づけるため、「天道」という通俗的な観念に基づく禍福論を呈示することとなった。養齋が堂主を務めた巾下学問所は、長くは続かなかつたものの、儒礼実践の試みそれ自体は、その後の尾張崎門派の人々に継承されていくこととなった。

養齋門弟の中村習齋は、巾下学問所が消滅したことで市井の立場とならざるを得なかった儒者達においても、実践可能な儒式喪礼の方法を呈示していた。それは、『家礼』と近世日本に所与の仏式喪礼とを融合させた、儒仏混淆による儒礼実践の方法であった。ただ習齋の場合に特徴的なのは、儒仏混淆が実のところ朱熹の見解と合致するのだとする解釈を行っていた点であった。習齋の儒仏混淆による儒式喪礼論は、実際に幕末期に至るまで尾張崎門派の人々の間で広く執り行われていくこととなった。このことは、仏教と混淆してでも儒礼を実践することが、市井の立場にあった儒者達にとってはほぼ唯一、現実社会との接点となり得たのだということの意味していた。つまり、幕政・藩政に参加できない多くの儒者達が辛うじて現実社会と関わりをもてたのは、儒式喪祭礼の実践だったのであり、習齋の議論は彼らにその模範を示すこととなったのである。

結論では、本稿全体の議論をまとめつつ、近世日本思想史上における闇齋学派の新たな位置づけを試みた。それは「門弟六千人」といわれ、近世最大の規模を誇った闇齋学派の求心力が、各地域や時代状況に対応した儒式喪祭礼の方法論を示し得た点にあったというものである。各時代状況に応じて、各々呈示される喪祭論そのものは異なったものの、この路線自体は綱齋の時代から習齋の時代まで変わることがなかった。そのために古学派が登場して以降も、闇齋学派は近世日本において、影響力を維持し続けたのである。最後に今後の課題として、上総道学のように近代まで命脈を保った他地域における闇齋学派の展開や、垂加神道の問題、あるいは闇齋学派と同じく古学派登場の前史として位置づけられることの多い藤樹学派を、同様に儒礼ないし思想の実践という観点から捉え直していく必要性を提起することで、稿を結んだ。